
みんなの森づくり 活動報告書

～10年を迎えて～



都市の森を再生する 「みどりの市民力」

松戸里やま応援団・囲いやま森の会（千葉県松戸市）



「森の楽校」の一場面。安全に木登りを楽しむ

ら、生き生きと活動する人々の姿があります。

里やまボランティアの活動

松戸では、2003年から市民と行政との協働による「松戸里やまボランティア入門講座」が開かれてきました。毎年、講座修了生による新たな里やまボランティア団体が生まれ、現在7団体で「松戸里やま応援団」を構成しています。また「応援団」とは別に、「関さんの森を育む会」、「金ヶ作の森を育む会」、「溜の上レディース」、「根木内歴史公園サポーター・根っ子の会」が活動しています。

各団体は、森の整備に取り組みつつ、それぞれに特徴ある活動を展開しています。

一起の会（1期）は、隣接住民の要望で森のかなりの部分が伐採されたために、市街地での森の再生に取り組んでいます。囲いやま森の会（2期）は、森の半分を自然状態に残しながら、「森の楽校」や「森の音楽会」など、市民参加の行事に力を入れています。三樹の会（3期）は、炭焼きや竹工作などを得意とし、地域の行事などに積極的に参加しています。四季の会（4期）は女性会員が多く、隣の老人福祉施設と交流しています。里やまV・千駄堀（5期）は、地域の町会と連携しています。活動を始めてまだ日が浅い小浜の森の会（6期）、七喜の会（7期）も、それぞれ独自の発展をしていくでしょう。

先輩格の関さんの森を育む会は、年間2,000人の生徒を迎え、自然の体験、学習の輪が大きく広がっています。金ヶ作の森を育む会は、松戸の里やまボランティア活動の先駆的な役割を果たしまし

千葉県松戸市は、江戸川を挟んで東京都に隣接する人口48万人のまちです。1960年代以降、都市化が著しく進み、樹林地は年々減り続けています。所々に残っている森も、多くは放置されたまま、市民生活からかけ離れた存在となっています。

その松戸で、今、11の里やまボランティア団体が、15カ所の森（うち13カ所は民有林）の整備に汗を流しています。活動している人の多くは、元東京通勤者の退職組。「千葉都民」と言われ、松戸は寝に帰るだけだった人たちが、「松戸市民」の自覚を持って新たな活動に足を踏み出しています。

「初めて市の広報を見るようになった」

「60歳を過ぎて、新しい友人ができるとは思って
もみなかった」

「通りがかりの人から「きれいになりましたね」と
声をかけられるのが嬉しい」

そこには、自らの居場所を見出し、新しい友人を得て、自然の恵みと社会に役立つ喜びを感じなが



市民参加の「森の楽校」には多くの家族連れが参加



森の楽校では様々な体験が可能

た。溜の上レディースは、素敵な「溜の上の森だより」を発行し、近隣の理解を広げています。根っ子の会のフィールドは市の公園ですが、定期的な植生調査、虫ハカセになろう、夏休み工作、湿地の再生や田んぼづくりなど、多彩な活動を展開しています。

花王・みんなの森づくり活動助成

囲いやま森の会は、活動2年目から3年間、「花王・みんなの森づくり活動」の助成（スタートアップ助成）をいただきました。40年間放置され、溝腐れ病のスギが多い森の整備は、手鋸などだけではとても進みません。まずは下刈りや作業通路の整備、樹木調査などから始めましたが、その先は見通しが立ちませんでした。

本助成により、チェーンソーやチルホール、発電機などの機材を整えられたので、危険木の伐倒も効率的に進み、市民や子どもたちを森に迎えられるようになりました。倉庫も手づくりし、会員の結束を強める場となりました。チェーンソー・刈払機の安全講習は、会員の技術と安全意識を高めました。

ゼロから森の活動を始めるに当たり、「花王・みんなの森づくり活動」の助成は、とてもありがたい支援でした。

松戸では、囲いやまに続いて、4期、5期、6期と連続して助成をいただきました。限られた枠の中での連続助成は、活動への自信を深めるとともに、社会の期待を強く感じさせられ、活動の継続と社会貢献の意欲を高めるきっかけになったと思います。それは、個々の団体への支援にとどまらず、松戸の

みどり保全活動全体を大きく後押しすることとなりました。

松戸里やま応援団活動の展開

松戸では、里やまボランティア入門講座が始まる以前から、関さんの森を育む会が活動しています。その中から「緑のネットワーク・まつど」が生まれ、市民参加型のみどり観察ツアーや、みどり保全のための意見交換などの活動を展開していました。「緑ネット」は、「松戸里やまボランティア入門講座」の開始にも大きな役割を果たしました。

この講座は、松戸里やま応援団（当初は「緑ネット」）、松戸まちづくり交流室・テント小屋、松戸市みどりと花の課の共催で実施されていますが、行政は下支えに徹し、企画や運営はほとんど市民の手によって行われています。受講生は、必ずしもボラ



森の音楽会

ンティア活動を志して応募してくるわけではありませんが、講座修了生のスタッフとの交流を通じて里やま活動の意義や楽しさを知り、講座終了後に自覚的にボランティア団体を設立し、受講生の7~8割が参加しています。

各団体は、それぞれ独立して個性ある活動をしています。相互に連携し、支えあってネットワークを形成しています。一昨年暮れ、共通する課題を協議する場として、「松戸里やま応援団連絡会」が発足しました。それ以前も、不法投棄ごみ回収日の調整や保険契約の統一などありましたが、毎月連絡会を開催するようになって、連携が強まりました。

特筆すべきことは、自主的な「ステップアップ講座」を始めたことです。“森で作業しているだけでは、森は守れない”という思いから、自らの知識、技術を高めようと始めました。これまで、①技術と安全（伐倒技術、チェーンソー、刈払機、救命救急）、②里山の自然（北総の自然、タネの旅立ち、生態系の管理法、草花あそび・ロープワーク、森づくりの計画をたてる）、③法制と行政施策（都市計画行政、みどり行政、農林行政）をテーマに開催し、毎回30人くらいが参加。引き続き、松戸市の里やま保全活動の課題、環境行政などをテーマに予定

個性ある活動とネットワークの連携



森の掲示板

されています。ステップアップ講座は、会員の知識、技術を高めるとともに、講師の行政や千葉大学園芸学部の方々との交流の機会ともなっています。

この他、連絡会の協議は、各種助成金の獲得、作業の廃材等の処理、焚き火の是非、ホームページの立ち上げ、共通する幟旗の作製など多岐にわたり、会議後の懇親会では様々なアイデアが生まれてきました。

こうした活動の進展を通じて、森の所有者団体「松戸ふるさと森の会」でもボランティア活動への理解と期待が広がってきました。「森の会」の研修会へのボランティアの招待、里やまシンポジウムの共催、国への要請行動など、共同の行動も行われています。所有者の要請を受け、昨年秋から「応援団」が共同で作業する新たな森の活動は、各団体の主力メンバーが参加し、経験を積んだ人たちの技術や知



伐倒実習



しいたけ栽培(上) 伐採竹で枝葉置き場(下)



倉庫づくり

見を身につける機会ともなっています。

今後の課題

松戸の里やまボランティア活動は着実に前進していますが、課題も少なくありません。

相続税問題や開発の波は否応なくのしかかっており、私たちが活動する森でも、近隣関係で多くの樹木が伐採されたり、活動地が切り売りされたりという事態が起きています。根本的な解決策はすぐにはありませんが、どのような方向に進むにしろ、市民の理解が不可欠です。整備した森を、所有者の理解も得ながらどう活用して行くのか、都市のみどりを守る声をどう市民の中に広げて行くのかが大きな課題です。各団体とも、掲示板の設置や近隣住宅への広報、一般参加のイベントの開催、地域や近隣学校などの行事への参加、作業体験の受け入れ

など、それぞれに努力しており、掲示板などを見て、新たに参加される方も現れてきました。森に来ていただければ、その素晴らしさ、大切さを感じていただけることは確実です。2011年5月には、ボランティア団体が活動している森を一斉に一日開放する「オープン・フォレスト」を実施し、大々的にアピールしようと、今その準備を進めています。

松戸の里やまボランティア活動は、これまで各期の講座修了生が一団体、一フィールドで活動してきました。そのため、居住地と離れた森で活動する機会が少なくありません。会員の高齢化が進む中で、地域に根ざした森の整備・保全のためには、もう一工夫が必要です。

森の活動は作業ではありません。自然観察やネイチャーゲーム、冒険あそび、工作・絵画・写真・俳句など、森の魅力はたくさんあります。さまざまな能力を持った会員が、各期の枠を超えて、多面的な活動が展開できるようになれば素晴らしいと思います。そのためには、組織や資金なども、新たな探求が必要です。より広域的な連携も必要となるでしょう。

まだまだ遅々とした歩みですが、急がず、あせらず、お互いの理解と認識を深めあいながら、地についた活動を進めていきたいと考えています。森の豊かな生命力に抱かれながら。

松戸里やま応援団・困いやま森の会
代表 野口 功



里やま講座で竹林整備を体験(写真左)
根っ子の会による田んぼの復活(写真上)